

特集 しつけってなあに

今回の特集のテーマは「しつけ」です。保護者の皆さんにアンケートに答えてもらひ、その反響の真剣さに正直圧倒されました。お父さんお母さん方の「しつけ」に対する真摯な思いが伝わってきたアンケートでした。

アンケートより

- ・しつけにより親の後姿をみせること。大人が手本を見せてくれれば、ある程度のことは、成長した時に自分でできる。
- ・人生を生きしていく上で、社会生活を円滑に過すことができるよう下準備をすること
- ・社会の中で自立しつつ周囲と共生できる子どもになつてほしい
- ・家族での約束、世の中のルール、マナーを教える
- ・「しつけ」とは「不快」の「不」を取り除いてあげて「快」に導く事と聞いた時、新しい感覚で気持ちが楽になった。

「しつけ」に関する意見は、親、教育者、研究者、医療関係者などによって、また、その人その人によつても考え方、捉え方は千差万別です。この「季刊まいづる」は、幼稚園の発行する冊子なので、幼児期の子どもを対象にし編集委員の教師たちが話し合い考へた「しつけ」に関する内容を、この特集で伝えていきたいと思います。そして、夫婦で、親子で、家庭と園とで一緒に考えていくきっかけにしてもらえた幸いです。

漢字で書くと「躾」ですが、絵本作家の五味太郎さんは、「躾」と

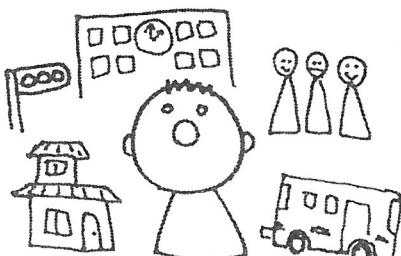
いう字にするのが正当だと述べています。（五味太郎著『大人が・は・の問題』）つまり身を世に合わせるということです。私にもこちらの方がぴたりくるように思えます。つまり、今生きている、またこれから生きていくであろう社会や世間に適応していくような身体にしていく、ということです。

社会の規範や常識というものは国によつて違います。細かく見れば地域によつても違うし、各家庭によつても違いが色々見えるものです。「しつけ」とは「美」という普遍的なものではなく、身の周りの世界や世間に合はせた変幻自在であいまいなものなのです。

今回のアンケートでも「しつけ」の捉え方、考え方には各家庭によつて様々でした。細かい作法的なことを大切にする家庭もあります。それがつまり家庭内の文化であつて、様々で良いと思います。ただし、その中でも気になる点がいくつありますので、それをこれから述べていきたいと思います。

アンケートより

- ・何度も言つても同じことを繰り返してしまつので、その都度注意します。この「季刊まいづる」は、幼稚園の発行する冊子なので、幼児期の子どもを対象にし編集委員の教師たちが話し合い考へた「しつけ」に関する内容を、この特集で伝えていきたいと思います。そして、夫婦で、親子で、家庭と園とで一緒に考えていくきっかけにしてもらえた幸いです。
- ・何回言つても聞かず、最後はどうなつてしまつのかが悩み。



・子じもに「じ」今まで言つて聞かせてあげるといふのか迷う。また、
「じ」今まで田をつぶつたら良いのか悩む。

しつけは「教える」「伝える」とことで、「叱る」とではない

着物を縫うとき、しつけ糸というものがあります。（漢字は仕付け）本縫いの縫い目が

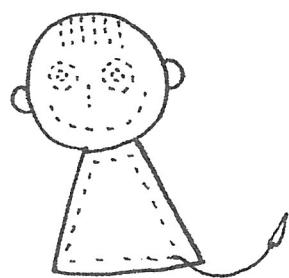
曲がらないよう、前もって大まかな形を定めるためのものです。このしつけ縫いこそが、

「しつけ」の本質を表わしています。つまり「しつけ」とは、大まかな枠組みを子どもに

与えること、子どもを大まかにガイドすることです。

大人の考える「こうしてほしい」「これをしてはいけない」という物事の基準を繰り返し伝えていくことが「しつけ」なのです。そして伝えていく内容ができるようになる時期は、その子その子によつてまちまちです。身につくのが早い子もいれば遅い子もいるでしょう。身体や心の発達と同じです。早いのが良く遅いのが悪いということではありません。それがその子の成長のしかたなのです。しつけたことができるようになる時は、子どもが自分で決めるのです。まだ難しいなら手助けをしてあげればいいのです。その手助けや保護などが、幼児期ではとても大切なことになります。大人がその成長の度合いを無理やりに曲げてはいけません。それにより様々な弊害が派生するおそれがあるからです。

まずひとつ、「しつけ」とは大人の価値観をただ押し付ける行為ではなく、子どもに繰り返し伝え、教えていくことなのだということを忘れないようにしましよう。



アンケートより

・しつけは、とても厳しくしている。厳しすぎるのではないかと悩むことがあるが、今のうちから習慣づけ、将来子どもが困らないためであり、人間の基礎になる大切なことだと信じています。
・何度も同じことを繰り返し言わなければいけないので大変。つい自分がきついと見て見ぬ振りをしてしまいます。

・「しつけ」で大切にしていることはダメなものはダメと、どんなに泣いても譲らないことです。厳しくしている分、その他の事はのびのびとさせてあげたい。

しつけの弊害、しつけの後遺症

「しつけがなつていない子が多い」という言葉を耳にしたことがありますでしょうか。「電車内や店内で子どもが騒いでも親は何も言わない」とか「今の親は子どもを叱れない」などという批判的な言葉を耳にしたことがあるでしょう。そのような言葉を軽々しく口にする人はおそらく、今の子育てを巡る難しい状況を知らない人が、子育て 자체にあまり関わってこなかつた人でしょう。

昔の親は今の親よりも子どもを叱つていたのでしょうか。いいえ、決してそんなことはありません。昔は（ここで言う昔とは、今の親世代が子どもの頃くらいまでのことで）まだまだ地域の力も残つておらず、子どもと親の接する時間は今よりもずっと少なかつたはずです。子どもの頃のことを思い出してください。幼児期でもひとりで、あるいは近所の友達と子どもだけで遊びに出てはいませんでしたか。親が子どもを目にしない分、必然的に子どもを叱る回数は今よりも少なかつたでしょうし、厳しく叱られたとしても、子どもには逃げ場（気持ちの持つて行き場）がありました。比べて今は、地域の力が全日本の皆無の状態です。そんな中、育児の重圧は各家庭に責任や心配という

形でのしかかつてきています。父親が忙しくなっている現在の経済状況では、特に母親にその重圧がかかります。今のお母さんお父さん方は、かつてなく真剣に子ども達と向き合い頑張って子育てをしている世代なのです。大変な時代です。

お母さんたちは「私が教えなくては」「子どものために」という義務感と責任感を持つて育児に臨みます。いきおい、しつけは叱るという形になつて厳しくなりがちです。一緒にいる時間が長い幼児期の子と親は、どちらにも逃げ場がなくなつてしまいます。公共の場で騒いだりする子は、しつけがなつていないと思われがちです。しかし、中には家庭でのしつけが厳しい分の甘えを外の場に求めている子もいます。単純に「しつけがなつていない」とは言いかねない面もあるのです。

厳しいしつけでも、そのしつけに対し子どもが反発して親が大変な場合、これには救いがあります。親と子の関係性が対等に近く、子ども自分の思いを出させているからです。問題は厳しいしつけが上手くいっている状態です。これはつまり親子での上下関係、言い換えれば「支配」「従属」関係ができあがっている状態なのです。その場合、「強迫」という後遺症が出る懸念があります。「強迫性格」とは、例えば、秩序正しさを好む、清潔好き、好みがうるさい、些細なことを気にする、けち、もつたいぶる、しつこい、頑固、我慢強い、感動しない、過度に良心的、優柔不断、物を集める傾向、変化を好みない、融通が利かない、などなどが挙げられます。この中には大人が子どもに対して、身に付けることが好ましいと思えるような性格も含まれています。後遺症ということは、これらの傾向が極端に強くなつて日常生活に支障をきたすようなことがあります。

アンケートより

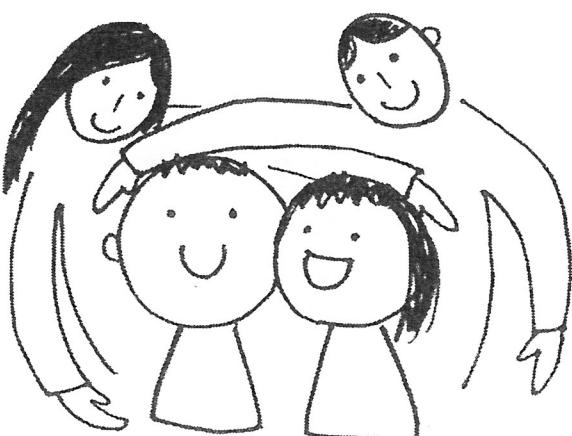
- ・私は例外を認めません。時と場合、場所でやつて良い事と、やつてはいけない事を変えないことです。やつて悪いことはどうでも

ダメだと教えています。親が「まあいいや」って思つてしまつて、子どもは迷うと思うので、出来ない日は肩の力を抜いてまた明日やろうーというスタンスで、と思つていますが感情的になつてしまつともあります

社会に上手く適応していくためには、なにともほどほどがよく、そのためには育児にもある程度の「いい加減さ」が求められます。まずは肩の力を抜きましょう。『しつけをしなきや』という意識を一旦捨ててしまつてもいいでしょう。幼児期の育児で一番大切なことは「しつけ」ではありません。大切なことは親子での信頼関係をしつかりとした土台になるよう築いていくこと、そして自己肯定感を育んでいくことです。

しかしながら、社会に適応していく力を教えていくのは、親の役割の一端ではあります。各家庭が、そして自分自身が、何を大切にしているかをもう一度考えてみてください。そのことが自分なりの「しつけ」をするうえでの基準点となるでしょう。

どのように子どもに接していくかのヒントとなるアイデア集を次のページから示していますので、それらを参考にして、明日からの育児に、肩の力を抜いて、楽しく臨んでいくくださいね。



「しつけ Q & A」

電車やレストランの大好きな声をあげる子どもが走り回っていたりどちらか?

(アンケートより)

- ・公共でのルールなどちゃんと守らせたいと思うと、他人の目が気になつたり、根気強く言い聞かせることができず、ついきつい口調で叱つてしまつたり、手をあげてしまつたりします。
- ・公園や子ども普法ザの様な所では、もう少し我が子の側について、よく見てほしいなあと思うことがあります。

電車やレストランはある種の公共空間です。そこでは、たとえ赤ちゃんであっても、子どもの倫理よりも公共の倫理が優先されます。親は何よりもそのことに気づかなければなりません。満員電車で大声で泣き出したとき、なだめたり、叱つたりしてもだめなら、次の駅で子どもを連れて電車をいったん降りる必要があるかも知れません。映画館で泣かれたら、子どもを連れてロビーに出なければなりません。レストランならいつたんロビーや廊下あるいは外にでて教える必要があるのでしよう。「お食事は大切な時間なのよ。ここは走り回ってはいけない場所なの」「ここはみんなが静かにする場所なんだよ。おうちとは違うのよ」しつけというのは、社会への配慮から始まると思います。周囲が、「そのぐらいの泣き声、大丈夫よ。気にしなくともいいわ」といつてくれれば、多少甘えてもいいかもしれません。しかし、こちらが、「子どもがいるのだから多少泣いても、走り回つても仕方ないでしよう」という態度



子どもが危ないと思った時どうなむ?

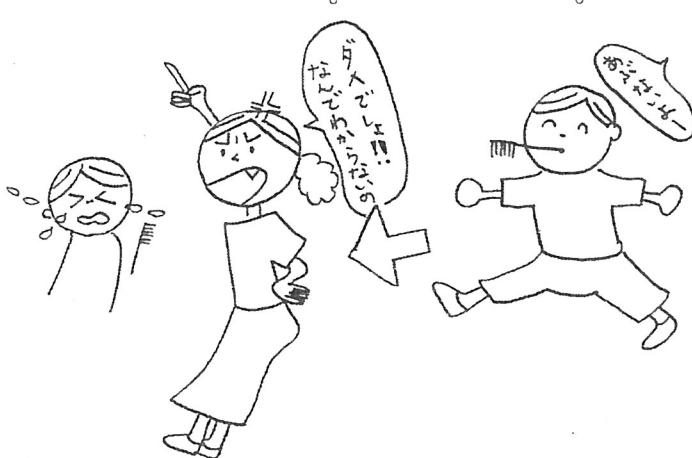
(アンケートより)

- ・危ないことをした時には、「ダメ」ということを伝えています。

子どもは好奇心旺盛です。危険性の認識などないままに、いろいろなことに興味を示します。火気を用いるガスコンロやライターなどをふさげて扱つたり、危険な場所に近づきそなときは「ダメ!」という警告・禁止の言葉を発する必要があるでしょう。「またやつて!」「ダメってわからないの?」などカツと頭に血が上り、叱る理由がちゃんと伝わらないしつけにはなつていませんか?頭ごなしに言われる「ダメ」だけでは、子どもの人間性を無視することにつながります。

「ここは入つてはいけない場所なダメ」だけでは、子どもの人間性を無視することにつながります。「ここは入つてはいけない場所なダメ」だけでは、子どもの人間性を無視することにつながります。「ここは入つてはいけない場所なダメ」だけでは、子どもの人間性を無視することにつながります。「とても危険なのよ」「これがしたかったのね。気づかなかつたわ。けど……」などと、きちんとその理由を述べたり、共感的な言葉を加えてあげたりして下さい。生活の中で必要な物だけど、使いつ方を間違うと危険なものに変わってしまう物もたくさんあります。使う前に丁寧に使い方を伝えていくことと、使い方を間違うと危険なものになつてしまうことも、教えていくことも大事ですね。

でいれば、社会はだんだん親に冷たく、子どもに厳しくなっていくかもしれません。公共の場でどの様に過すことがいいのか、まず大人が伝えることが大事なことですね。



「子どもの言葉つかいが気になるとやめとひつぱりいいの？」

使つてほひくなじ言葉を使つとやめとひつぱりいいの？

(アンケートより)

- ・子どもが大人(親)に対して「お茶」「はん」「うして」と言つたら「お茶下さい」「うしてください」と言い直しさせます。でも、「うして下さい」と言いなさいとは言わずに「あれ、この言い方でいいのかな?」と本人に訂正させています。
- ・小さい時から「お茶下さい」、ついでもらつたら「ありがとうございます」と言つたなど、人にに対する言葉遣いは丁寧にと言いつけています。(子どもが出来るかどうかは別として)基本的に子どもは親の後姿を見て育つというので自分がお手本だと思つてゐる。その成績は子どもが大人になった時に出ると気長に考へてゐる。でも『気がついた事はその都度、注意して』いる。



「死ね」「殺す」「バカ」など、社会の中でも人に向かつて使うにはふさわしくない言葉があります。子どもは良し悪しなど考へず、おぼえたことは試したいものです。そのような言葉を我が子が発するのを聞くと少なからず驚くことでしょう。そんな時はどうすればいいのでしょうか。

まず社会の場で誰かに向かつて発している場合、9ページの「友達を叩いたとき」の対応と同じ様にすればいいのです。言葉の暴力とも言えるからです。

そして家中で使う場合。なぜそういう言葉を使うのか、ゆっくり考へてみてもいいでしょう。子どもはそういう言葉を使う理由があるから使うのです。その気持ちや思いをまず理解することが大事です。皆さんも頭にきたときは汚い言葉で発散したりする経験があるのではないかでしょうか。頭「ななし」に「使つちやいけません！」では、その気持ちの持つて行き場がなくなるだけです。話を理解した上で、「でも私はそういう言葉は嫌いだな。」「使つて欲しくないと思つている。」と伝えればいいのです。



つつかじはじ父親と母親の一貫性は必要?

アンケートの中に「父親との一貫性は必要でしょか? それとも敢えてそれぞれの指針をぶれないとすればそれで良いのでしょうか?」との悩みがありました。人のものを取ってはいけないなどの必要最低限の一貫性は必要だとは思いますが、細かいしつけの一貫性は必要なこと考えます。家庭内でも色々な価値観を持つている人の中で暮らすことが、より柔軟に物事を考えられる力につながります。さらに、大切なのは「夫婦一緒に怒らない」ことです。一緒に怒ってしまうと子どもは追い詰められ、逃げ場もなくなり、深く傷つきます。叱った後は、夫婦どちらかは子どもを受け止め、しっかりと話を聞き、子どものが逃げ場、ホツとできる場を作つてあげてください。



- ・まずは子どもの思いを聞く
- ・いきなり「ダメでしょー」「謝りなさい」と責めるのではなく、「どうしたの?」と状況や子どもの思いを、冷静に聞きましょう。
- ・中立の立場で、子どもの思いに寄り添つて相手がいるはずなので、両者の言い分を聞き、くい違いや勘違いは、大人が整理したり、代弁したりして互いの思いが分かり合えるよう橋渡しします。
- ・何がいけなかつたか、どうすれば良かつたのかを伝える
- ・「うしなさい」ではなく一緒に考えながら話しましょう。

感情的になつたときの対応について

アンケートを見ていると、感情的に怒つて叩いてしまい後悔したという回答がいくつもありました。頭では叩いてはいけないと分かっていても、親も人間ですからついイライラしてしまうこともあると思います。そこで感情的になつたときにどうしたらいいかアイデアを少しお話したいと思います。

①怒りを爆発させる前に大きく深呼吸しましょう。吸つて吐いて吸つて吐いて。これをゆっくり何回か繰り返しましょう。

②自分はどんなことでカツとするか考えましょう。それが分かれば予測もつくし、前もつて防いだり、対処法を考えたりもできます。

③時には感情的になることも仕方のないことでしょう。ただし、お父さんやお母さんが自分を嫌いになつたわけではないことを、子どもによく伝えましょう。もしカツとなつて、どなつたり叩いたりしてしまつた時は、後で謝りましょう。子どもにも感情があることを忘れずに。

★アンケートからお母さん方の工夫★

- ・一から十まで数えるようにしている
- ・カツとなつたら、私は少し別室に行つたりしてクールダウンをしている



どちらがいいですか？

子どもの心に届きやすい叱り方にもコツがあります。

まず、叱り方にも段階をつける、ということ。

一、見て見ぬふりをする。遊ぶときに砂や水が少々こぼれないとか、マジックがはみ出して床や服についているとか、目をつむれるところは見ないふりをしてみましょう。

二、いい顔をしない。いたずらの度が過ぎたり、物を乱暴に扱つたりしたときには、嫌なような困つたような顔で見るだけでもその思いは伝わります。

三、しつかり叱る。危険なことをしたときや人を傷つける行為をした時などは、はつきりとした口調で叱りましょう。このような段階をつけることで、子どもにも本当に大事なことは何なのか伝わりやすくなります。どの行為がどの段階にあたるかは家庭の価値観によって変わつてもいいでしょう。

そして叱るときの言葉について。

上から目線の言葉ではなく、横並びの立場としての言葉を選ぶということ。行動を叱り、性格を叱らないこと。叱るときはスカツと叱ること。

例えば下の子とケンカして叩いた時など、「また小さい子を叩いて！どうしてあんたはそんなに乱暴者なの！あやまりなさい！」という「あなたの言葉」ではなく、「小さい子を叩くのはよくないと思うな。わたしは人を叩くことは嫌いだししてほしくない。」という「わたし言葉」を心がけると分かりやすいかもしれません。



「子どもを叩くことについて」

アンケートより

- ・叩くことは本当は良くないと思う。叩いたあとに後悔する。子どもには叩いたりすることはダメと教えてるので親がしていたらダメだと思う。
- ・良いことだとは思わない。しかし全く叩かずにしつけをすることは難しいことだと思う。
- ・基本的には叩かないが、子どもが叩くのをやめないと叩く。
- ・友達や兄弟で喧嘩をして手を出し、相手に嫌な思いをさせたときにはしっかり怒って叩く。
- ・誰かを叩いたとき、止めたのにとっても危険なことをしたときは、手やお尻を叩いたことがあります。
- ・子どもが怪我をするほど叩く事は賛成できませんが、兄弟に手を上げたとき、危険なものを触ろうとしたとき等、必要に応じて叩くことは間違つていいと思います。頭は危ないので、いくら咄嗟の時でも、必ず手かお尻を叩く様にしています。
- ・日常的にしつけに取り入れるのは間違っていると思うが、人には害を及ぼすようなことをしたり、自分が叩かれた痛みを、相手の痛みとして知る為にはぐまれに必要な時があるのではないかと思う。
- ・親としては、強く教え込みたい一心で叩く行動に出がちであるが、叩かれた子どもにとっては、叩かれたからといって、親のメッセージを強く受け取るとは限らないようで、実効性には疑問が残る。
- ・私は食べ物を粗末にしたときと身の危険にさらされるような危ないことをしたときに叩きますいつも叩かないと効果は絶大です。止むを得ないと思います。ただ叩く場所はお尻にだけしています。

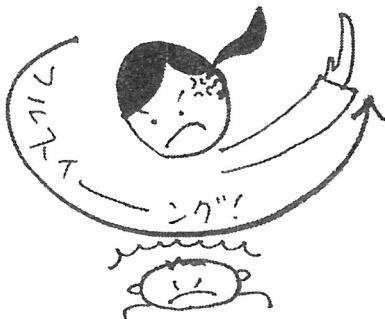
今回のアンケートに「叩く」という項目を入れたことは、些か刺激的だったでしょうか。しかしながらこの項目でも多くの方が真剣な思いを綴っており、こちらとしてもその反響に喰らばかりでした。

アンケートの結果を大まかに整理してみました。その結果、「しつけのために叩くことはある程度仕方がない」などという叩くこと肯定の意見と、「叩くことはいけないと思うが、つい手が出てしまって反省する」「絶対にいけないと思い、叩いたことはない」などという否定の意見は、約半数ずつでした。

アンケートより

(賛成)

- ・危険を教える為、命に関わることについては、叩くことも必要なときもある。
 - ・悪いことをしたらかまわない。
 - ・身に危険が及ぶもの、人を傷つけた時本当にいけない時には、「叩く」というものもひとつのやり方だと思う。
- (反対だがやつてしまい反省)
- ・よくない事だという認識はあるし、叩いた後は自分の手もいつも痛く感じ(後悔から)ます。
 - ・叩かれる本人はもちろん、叩く方もとっても嫌な気持ちです。
 - ・感情になつて叩くことは良くないと思う。



・叩いた後には自分もものすごく落ち込みます。けれど、本当に危険なことをした時など、二度と同じことをさせないためには仕方ないのかなと思います。

・平和的な解決法、平和な伝え方はいくらでもある。

・カツとなつたら10まで数えると少し冷静になれる。別室に行つたりしてクールダウンしている。

・叩かれてその場は言うことを聞くだろうが、子どもも慣れてきて親もエスカレートするのでは!?

・冷静でいる様、努力はしますが、叩いてしまった後で謝るようにしている。

・自分の感情（怒り）を抑えることができない時叩いてしまった。叩くことで発散させているだけではないか。

・親の気持ちを話すことと同じくらい子どもの気持ちを聞くことが大切。そして、お互いが納得することで、物事がうまくいくような気がする。

・何で怒られているのか理解させることが大切。

（反対）

・犬や猫でも根気があれば叩かずにしつけができるのに、子どもを叩いてしつける必要はないはず。

・叩く＝体罰だと思う。何の解決にもならないと思う。
ダメだと思う。

アンケートより
・親でも約束を破つたり、感情的に怒ったときはきちんと謝る。
ごめんなさい、ありがとうを言う。
・人間だもの：しつけるのではなく共に考え、共に悩み、共に成

長していくたら良いなあ、って思います。

子どもは親とは違うひとりの人格である

例えば、友人が正しくないことをしたからといって、叩いて正そうとするでしょうか。危ないことをしている人を叩いて「してはいけない」と諭すことがあるでしょう。そんなことをすれば、もしかしたら罪に問われるかもしれません。それがなぜ子どもを対象とすれば正当性がまかり通るのでしょうか。それは子どもの人権を無視している行為といえます。子どもは親の所有物ではなく、人格を持つひとりの人間です。その人権を侵害することはたとえ親であろうと正当性を持つことはありません。



アンケートより

・子どもによつても違うと思うが、叩いて良いことはないと思う。
子どもは叩かれた時の嫌な感情の記憶は残つても、何がどう悪かったか理解はできていなかつたがが多いのではないか。
・日常、痛さを分からせる時、軽くつねつていて。叩くより距離が近いし、手首などギュッと大人の力で握れば子どもは、それなりに感じるものだと思うので…。

叩くことでしつけはできない

アンケートでは「叩く」という言葉を使いましたが、正確に言えば、「子どもに恐怖感や痛みを与えて言うことを聞かせること」ということ

とです。叩かなくても、怒鳴って叱ったり、条件を出して（押入れに閉じ込めるよ、ご飯抜きだよ、などなど）言うことを聞かせたり、もちろんつねつたり強く握つたりも叩くことと同義です。軽くコツンと

小突くよりも、言葉の暴力が心に傷を残すことは大いにあります。

5ページで述べたように、「しつけ」は大まかな枠組みを教え、後はそれを子どもが身に付けるまで辛抱強く待つ行為です。その過程には子ども自身が「そうなりたい」という思いを持つことが必要不可欠です。子どもの自己肯定感とともに身に付いたものでなければ、本当の意味で自分の力にはなりません。恐怖感や痛みによつて「やらされて

いる」うちは、その恐怖感が持続する間だけの一時的な力でしかありません。むしろ親の力が及ばなくなつた後の反動が大きくなることの方が問題になるかもしれません。叩かれて残るものは、よくよく考えてみると、悔しさや恐怖感など、負の感情しかないからです。

たとえそれが危険なことや絶対にしてほしくないと思っていることでも同じです。叩かなくとも親の真剣な思いは伝わります。叩くことでむしろ恐怖感の方が先に立ち、伝えたいことが本当の意味で伝わらないことの方が多いかもしれません。

アンケートより

- ・ついつい口うるさく怒つてしまふ。
- ・「こ」などばかりでハツとした。
- ・子どもに厳しすぎるのではと悩む。
- ・各家庭・人それぞれ違うので、その尺度について悩む。友達と行動する時など、大人の対応・親の対応が異なるので自分の対応も揺らいでしまう。
- ・「うちなかつたらうしないよ」と罰的な言い方をしてしまう。
- ・親の都合で叱つてしまふ。「いい子」というのが親にとつて都



合のいい子になつてないか!?

・同じことでしかつたり、注意したりしている気がする。どうしたらしいのでしょうか?

・頭では叩いてはいけないと分かっていても、感情的になつて必ず以上に叩いてしまつたときには、自己嫌悪に陥ることがしばしばです。夫は絶対に子どもに手を上げないのでいつも感謝しています。でもそのかわり言葉が強く（悪く）なつていくので、うん言葉の暴力もあるよなあと・・・本当に忍耐強くならな

いといけないですね…。

・言うことを聞かなくて感情的に怒つてしまつて叩いたことがあります。結局子どもに至つてはどうして怒つたのかは分からずしだいで、2人して後味の悪い気分になり、後悔した。

・これまでに数回叩いてしまつたことがあります。自分の感情のままに叩いてしまつたような気がして罪悪感がしばらく消えませんでした。

・子どもが理解・納得できるように言葉を尽くして説明したいと思つていますが、冷静さを保つことが難しいときも少なくありません。

・子どもが理解・納得できるように言葉を尽くして説明したいと思つていますが、冷静さを保つことが難しいときも少なくありませんでした。

叩く時は感情的になつてゐることがほとんど

叩いたり、怒鳴つたり、子どもを泣かせてまで「言う」とを聞かせたりしたときのことを思ひ返してみてください。それは本当にそこまでするべき内容の事柄だったでしょうか。そうすることで後々の効果は上がつたでしょうか。もつと他の方法は考えられなかつたでしょうか。そしてその時の自分自身の精神状態はどうだつたでしょうか。

たいてい子どもを叱るとき、親はイライラしています。そのため言葉も行動も荒っぽくなつてしまします。そしてよく思い返してみると、自分が疲れているときだつたり、生活が上手く回つていなかつたり、

なかなか自分の思い通りにならないときだつたりすることが多いのです。つまり、よく考えてみると大目に見てもよさそうなことでも、そのような大人の都合で叱つてしまることがしばしばあるのです。

でもそれはある程度仕方のないことです。6ページでも述べたように、今は子育てをするのにかつてなくストレスや大変さを伴う時代です。子どもと一番長い時間を過ごす親がイライラするのは当たり前です。親の都合で感情的に叱つたり、もしかしたら叩いたりすることもあるでしょう。その行為は、冷静に叩くよりもよっぽど自然だと思います。親も人間です。弱い部分も大いにさらけ出していいのです。そして悪かったなという気持ちがあつたら、素直にそれを子どもに伝えればいいのです。親子の人間として対等な関係はそうしてつくられていくし、そこから学び、お互いに育ち合える部分も大いにあるはずです。

子どもが5歳なら、親も親になつて5歳。未熟な親子同士、一緒に育つていましょう。

アンケートより

- ・頭ごなしに「ダメ」と叱るのではなくて、できるだけ、どうしてそうして欲しくないのか伝えるようにしている。「～してくられたら嬉しいな」「～してもらつたら助かるな」などの誘導もしている。

叱ることで子どもが伸びることはない

子育ての中で、子どもを叱るということはとても大切で必要なことです。特に、自他の命を傷つけること・弱いものを力で押さえつけることなどは、はつきりと否定して叱るべきことです。その他にも家庭により親により叱るポイントは色々とあるでしょう。その中でひとつ知つておいてほしいことがあります。

それは、叱ることでは子どもの力は育たない、ということです。子どもが伸びるのは、自分自身で自分が「がんばった」「よし、よくやった」と思える気持ち、つまりプライドや自己肯定感が芽生えるときです。特に幼児期は親から周りの大人が保護してもらひながらそういう力を伸ばしていく大切な時期です。それが後々までの成長の土台となります。

叱ることで自己肯定感が伸びることはありません。叱ることは必要なことですが、それは育児における危機的状況だと言えることでもあります。叱るときはしつかりと親の思いが伝わるように叱らなければいけません。ただし、危機的状況が日常になつてしまわないよう留意することが大切です。

以上、今回の特集では、子どもを叱る、叩くことも含め、しつけて考えてきました。

最後に一つ、お母さんお父さん方に伝えたいことがあります。それは、大人みんなで子どもみんなを育てていきましょう、ということです。

子どもの成長は親だけが担うものではありません。子どもを囲む周りの大人たちのあたたかいまなざしの中에서도、子どもはのびのびとした成長を遂げることができます。私たちはそんな社会を目指していくべきだと考えています。

家庭と園とで、そして、親同士でつながり合い、甘えさせる時も叱る時もしつける時も、大人たちみんなで手を取り合つていきましょうね。

